

恵庭市郷土資料館・恵庭市消防本部共催事業

# 恵庭消防創立100周年 1年前記念展

大正12(1923)年、恵庭村消防組が公設されてから令和5年で創立100周年を迎えます。これを機に、恵庭消防の歩みを振り返ります。



高機能感染防止衣



開催期間

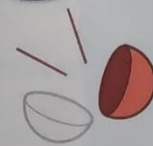
**11月3日 木・祝**  
▶ **11月20日 日**

但し、11月4・7・14日は休館日です

場所

恵庭市郷土資料館 1階 特別展示室

期間中、  
消防クイズに答えて  
消防車両缶バッジを  
GETしよう!



フォグガン



霧そう



ノズル

## スタートイベント

・消防車両展示 ・放水体験

日時

**11月3日(木・祝)**  
**10:30～11:30**

会場

郷土資料館 玄関前

・恵庭非公式ヒーロー **1日消防署長**

**アルケイド**さん  
がやってくる!

・北海道消防協会キャラクター

**消太**くんも!

消防カードの  
配布もあるよ!



消防カード



防火衣

問い合わせ先

恵庭市郷土資料館

恵庭市南島松157-2 TEL/FAX 0123-37-1288

開館時間 9:30～17:00

入館料 無料

## 2.展示室全体 1 (恵庭市郷土資料館)



### 3.展示室全体 2（恵庭市郷土資料館）



### 4.まといと腕用ポンプ（恵庭市郷土資料館）



5.展示室全体 3 子供用防火衣 (恵庭市郷土資料館)



6.展示室入口法被 (恵庭市郷土資料館)



## 7.展示室の様子 1 刺し子の防火衣（恵庭市郷土資料館）



刺し子とは、数の布を重ねて刺し縫いという縫い方をした布、またはその布で仕立てた衣服をさします。丈夫で保温効果があることから古来、納所行儀、柔・剣道着、火消しの防火衣として使用されました。火消しは、この防火衣に水を含ませて消火活動にあたったそうです。

## 8. 展示室の様子 2 防火衣 (恵庭市郷土資料館)



主に火災現場で着ます。耐熱性・防水性に優れ、特殊な生地を使い織り方を工夫することにより引き裂きなどの強度も普通の服とは違う構造になっています。さらに透湿性を備えており、現場での熱中症防止にも配慮されています。

## 9. 展示室の様子 3 活動服（恵庭市郷土資料館）



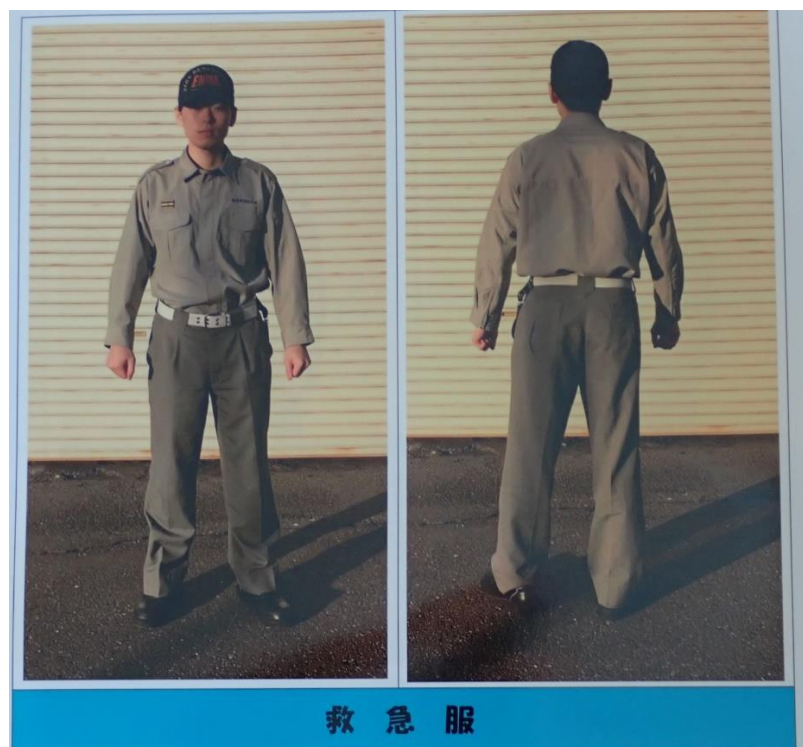
消防隊の活動服です。この服の上に高熱に耐えることのできる防火衣を着て火災出動します。この服は燃えにくいアラミド繊維という素材で作られており、身体の動きに合わせた構造に加え、ストレッチ生地により自然な動きが可能につくりになっています。

## 10. 展示室の様子 4 救助服（恵庭市郷土資料館）



救助隊が着る服です。強靱性、摩擦性に優れていて、燃えにくいアラミド繊維で作られています。生地は特殊な糸が十字に縫い合わせられており、引き裂きにも強く、身体の構造に合わせた立体裁断とストレッチ生地により自然な動きが可能になっています。

## 11. 展示室の様子 5 救急服 (恵庭市郷土資料館)



救急隊が着る服です。上着は薄い灰色、ズボンは濃い灰色で清潔感を与える色調になっています。立体裁断という身体の構造に合わせた形状になっており、出動するときには感染防止のため水色の防護衣を重ね着します。

## 12. 展示室の様子 6 高機能感染防護衣（恵庭市郷土資料館）



救急隊員が細菌やウイルスなどの感染を防ぐ防護衣です。このほかにも、マスク、手袋を着用し、出勤先で感染するリスクを最小限にします。生地はナイロンのように見えますが、水やウイルスなどは防ぎ、汗や熱気を放散できる特殊な加工が施されています。

13. 展示室の様子 7 制服（恵庭市郷土資料館）



【制服(冬服)】

消防本部で毎日勤務者として勤務するときや、消防長による全消防職員を対象とした通常点検もしくは特別点検を受けるとき、また儀式及び祭典に参列するときに着用します。



【制服(夏服)】

消防本部で毎日勤務者として勤務するときや、消防長による全消防職員を対象とした通常点検もしくは特別点検を受けるとき、また儀式及び祭典に参列するときに着用します。冬服より薄手の生地で作られているため、夏でも涼しく快適に過ごすことができます。

## 庁舎・車両の歴史

### 1. 恵庭村消防組第壱部(大正 10 年頃)



恵庭村消防組は茂漁・漁火防組、島松消防組が大正 10 年 7 月に公認され発足し、茂漁を第壱部、漁を第弐部、島松を第参部とした。消防組第壱部は、大正 4 年に野原秀太郎氏、林愛助氏ほか多数の有志により茂漁地区に設立された私設茂漁火防組が前身である。

写真では第壱部の組員のほか、中央に腕用ポンプ、左に纏(まとい)と火の見櫓のはしご部分を確認することができる。

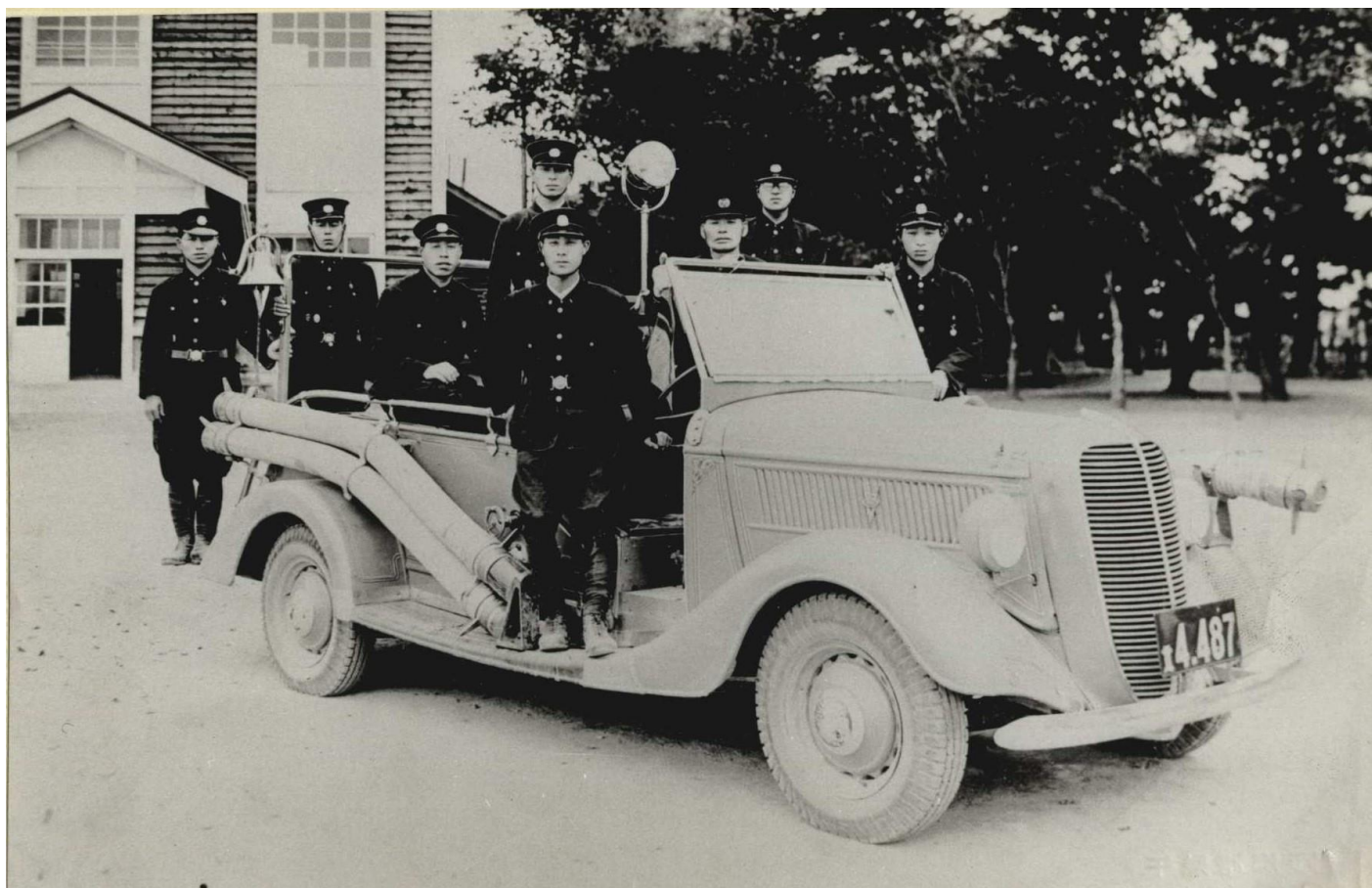
## 2. 中央私設消防組(大正 13 年頃)



中央私設消防組は大正 13 年 7 月、加藤梁一氏、加藤梅太郎氏ほか多数の有志により設立され、中央区の消防を担った。

写真では、現在、郷土資料館で所蔵する腕用ポンプと同型のポンプを確認することができる。

### 3. 恵庭村警防団第1分団と消防ポンプ自動車(フォード)(昭和14年頃)



昭和14年4月に消防組を警防組に改組し、第壱部、第弐部、第参部をそれぞれ第1分団、第2分団、第3分団とした。

写真は、警防団第一分団(恵庭地区)団員と大正11年に漁・茂漁地区有志の寄付金により、恵庭に初めて整備された消防ポンプ自動車(フォード)である。

#### 4. 恵庭村警防団第3分団詰所と消防ポンプ自動車(シボレー)(昭和14年頃)



警防団第3分団は大正4年に中恵庭地区に設立された私設恵庭火防組が前身であり、大正12年に公認、昭和9年に消防組第3部、昭和14年に警防団第3分団と変遷を辿り、昭和14年9月に上山口地域住民により木造2階建1棟(上山口24番地)を詰所私設として寄付を受けた。

写真は、詰所と同時期に購入された消防ポンプ自動車(シボレー)である。

## 5.私設北島松消防団員と小型三輪自動車(昭和 34 年頃)



私設北島松消防団は現在の消防団第5分団の前身であり、昭和34年に小玉運吉氏ほか多数の有志により北島地区に設立され、同年詰所兼車庫を穂栄50番地に新築した。

写真は当時の詰所と同時期に税目された小型三輪自動車であり、荷台に小型動力ポンプを積載している。

## 6.私設漁太消防団詰所と小型三輪自動車(昭和 36 年頃)



私設漁太消防団は昭和 21 年に橋本数馬氏ほか多数の有志により漁太地区に設立され、昭和 45 年に地域の陳情を受けて公設編入され、恵庭町消防団第 4 分団として発足。

写真は、昭和 18 年に建築された詰所(木造 2 階建垂鉛葺)と昭和 34 年に購入された小型三輪自動車であり、荷台には町内有志及び農協の寄付金により購入した可搬式小型動力ポンプを積んでいる。

## 7.旧消防庁舎(昭和 36 年 3 月)



旧消防庁舎は、消防団本部及び第 1 分団詰所兼書庫(鉄筋コンクリートブロック造一部二階建)として京町 80 番地(現在の恵庭商工会議所)に建設され、昭和 55 年に現在の消防総合庁舎(有明町 2 丁目)に移設されるまで恵庭消防の拠点として併用された。

写真は竣工当時の庁舎と手前の車両は昭和 30 年に整備された水槽付消防ポンプ自動車である。

## 8.昭和 39 年当時のポンプ操法



昭和 39 年 5 月、町の急激な発展により火災が多発していたことから消防本部が設置され、常備員 4 名の編入も加え職員 14 名体制となった。

写真は当時の職員によるポンプ操法の風景であり、車両は昭和 30 年に第 1 分団に配備された水槽付消防ポンプ自動車である。

## 9. 恵庭初の救急自動車(昭和 46 年頃)



昭和 46 年 12 月、道央高速自動車道の開通を受けて日本道路公団から救急自動車 1 台が贈与された。

昭和 46 年の救急出動件数は 143 件(搬送人員 134 人)であり、令和 3 年の救急出動件数 2511 件の約 18 分の一(5.7%)ほどであった。

## 10.消防団第3分団詰所兼車庫と消防ポンプ自動車(昭和47年頃)



昭和47年9月、中央381番地に中恵庭出張所の一部を改装し、第3分団詰所兼車庫を建設した。

写真は、当時の詰所と同時期に日本損害保険協会より寄贈を受けた消防ポンプ自動車である。

## 11.島松分遣所兼第 2 分団詰所(昭和 53 年頃)



昭和 49 年 12 月、消防署島松分遣所兼第 2 分団詰所が建設(ブロック造平屋建)され、島松市街の木造建から島松東町 80 番地に移設された。

写真のサイレン塔は昭和 53 年に建設されたものである。

## 12.消防総合庁舎(昭和 55 年)



市制施行から 10 年が経過し、まちの発展に伴い消防職員、車両の増強が図られた。消防庁舎は狭あい化が顕著となったことから、現在の所在地である有明町 282 番地に新庁舎が建設されることとなった。建築工事は昭和 54 年 7 月に着工し、翌年 1 月に竣工した。

平成 26 年にはさらに増改築が行われ、高機能指令センター、女性消防職員の当直施設が整備され、現在に至っている。

# 放水器具の歴史

## 消防用ホースの巻き方

### 【二重巻き(にじゅうまき)】



ホースを真ん中で二つ折りにし、端からぐるぐると巻いたもの。

平坦な場所などで転がすようにして延ばして使用し、車両や棚などの収納に適している。

### 【一重巻き(ひとえまき)】



ホースを真っすぐに延ばし、オス金具(キラキラしている金具)からぐるぐると巻いたもの。

平坦な場所などで転がすようにして延ばして使用するが、二重巻きとは違い一度に伸ばし切ることができる。

### 【島田折り(しまだおり)】



ホースをジグザグに折りたたんで重ねたもの。

主にバンドなどで固定し、肩にかけて搬送するだけで重なったホースを伸ばすことができる。直線はもとより会談などの勾配がある場所や左右に曲がりくねった場所での延長も可能である。

### 【狭所巻き(きょうしょまき)】



ホースを大きな輪を作るようにぐるぐる巻き、二つに折りたたんだもの。

主にバックなどに収納し搬送する。水を通すと円状に広がるため、ベランダなど限られたスペースでの使用に適している。

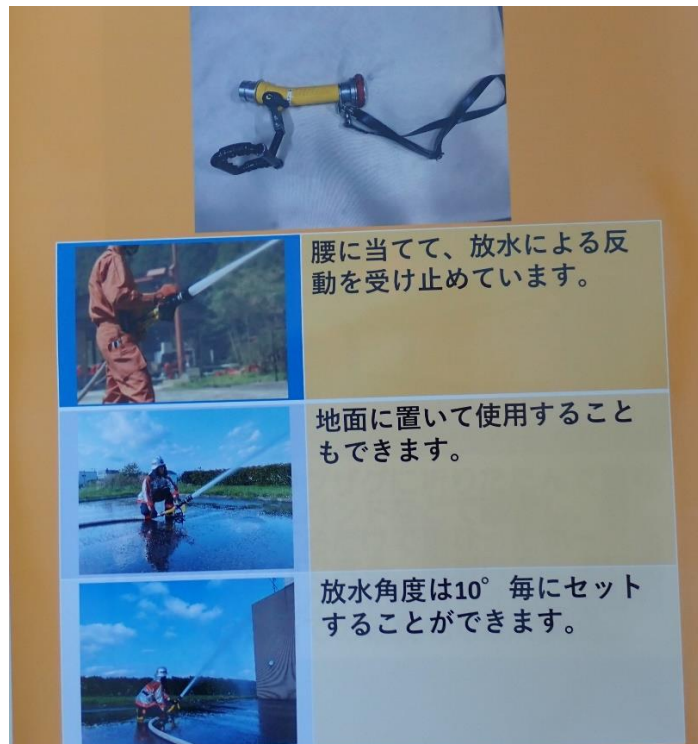
## 放水器具

### 【ノズルフォルダー】

この資機材はホースとノズルの間に装着します。

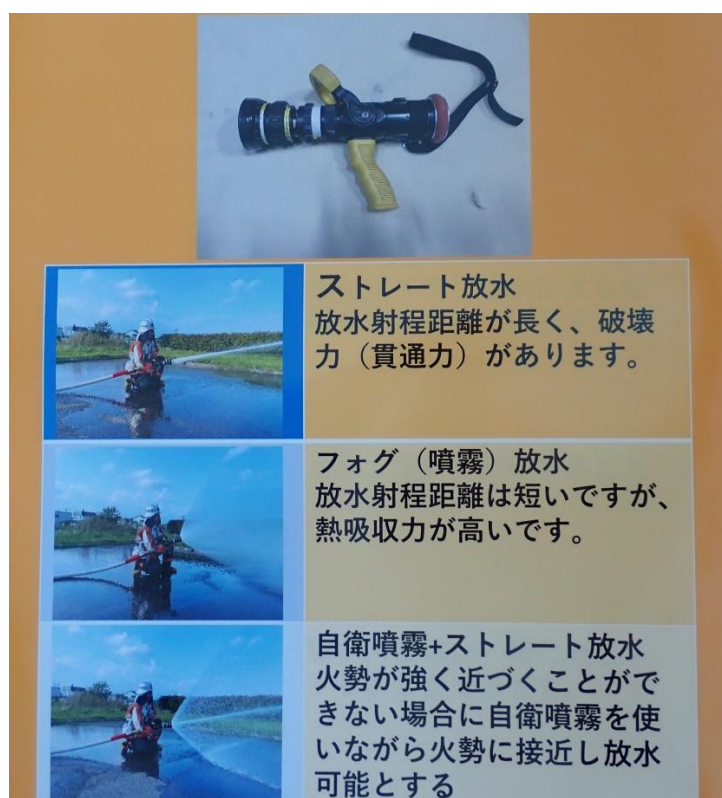
これを付けることによって放水時に発生する反動力を腰骨等で受け止めることができます。

長時間の活動や、強い反動力が発生する場面で活躍します。



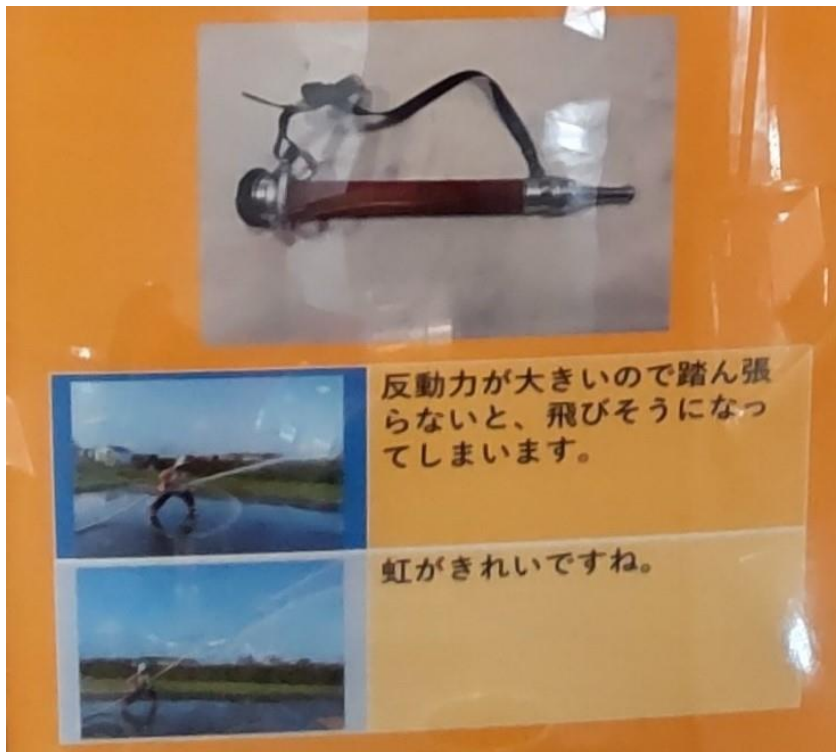
### 【クールファイターノズル】

自衛噴霧放水機能付きのノズルです。ノズルより手前の温度を一気に大気温度まで低下させることができます。



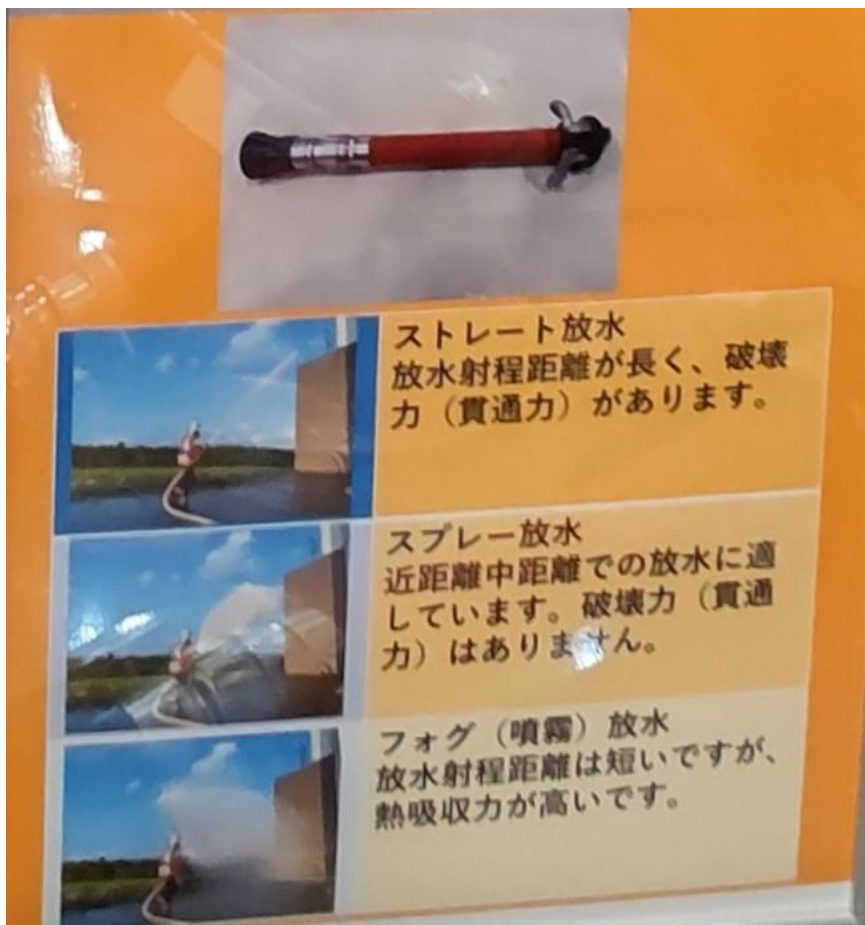
### 【管そう+スムーズノズル】

水流の内径を管そう出口からノズル口径まで滑らか(スムーズ)に絞って放水するノズルです。棒状放水専用のノズルで、摩擦損失が少なく、最大放水射程を得ることができます。




### 【管そう+可変式ノズル】




ストレート放水、フォグ(噴霧)放水を可能としたノズルです。ガンタイプのノズルと異なり、流量の調整はできませんが、大量に放水が必要な際に役立ちます。



## 【フォグガン】

高層ビルやマンション、地下室のような狭い場所での火災に対し、少量の水でよりスムーズな消火活動と大きな消火効果を生み出すために開発されたガンタイプのノズルです。



	<b>ストレート放水</b> 放水は3段階調整可能です。 クールファイターノズルと比べ見ると、水の出る量が少ないのが分かります。
	<b>スプレー放水</b> 冷却、窒息、消煙効果や水損防止に優れているノズルです。
	<b>フォグ（噴霧）放水</b> 大量放水が必要な火災、強風のなかでの使用には適しません。

## 【ホースクランプ】

通水しているホースの水を止めることができます。ポンプを止めることなく、ホースの延長等を行うことができます。



## 【二股分水器】

消防車の放水口(水が出るところ)1つから、2口放水が可能になる資機材です。伸ばすホースの本数を軽減することができます。







1910-1915  
1910-1915

1915-1920  
1915-1920

1920-1930  
1920-1930

# 可搬式小型動力ポンプ

平成 8 年 トーハツ B-2 級

放水量 1.12t/

最大圧力 1.0Mpa

放口 2 口、吸口 2 口、中継口 2 口



## とび口の歴史

この先の尖った道具を「とび口」といいます。

由来は先の金属部分が鳥の鳶(とび)に似ていることから名づけられました。

とび口は江戸時代から存在します。江戸の火消しは、火災が起きると現代のように十分な水がなかったため、燃えていない建物を壊して消化しました。その時に使われたのがとび口です。

現在は、江戸時代のような消火方法を行いませんが、今でも消防で使用されており、窓ガラスを割ったり、壁を剥がしたり、燃えたものをどかしたりと、隊員が安全に活動するための必需品です。

この先の尖った道具を「とび口」といいます。由来は先の金属部分が鳥の鳶(とび)に似ていることから名づけられました。



とび口は江戸時代から存在します。江戸の火消しは、火災が起きると現代のように十分な水がなかったため、燃えていない建物を壊して消火しました。その時に使われたのがとび口です。

現在は、江戸時代のような消火方法を行いませんが、今でも消防で使用されており、窓ガラスを割ったり、壁を剥がしたり、燃えたものをどかしたりと、隊員が安全に活動するための必需品です。





### とび口の歴史

この先の尖った道具を「とび口」といいます。由来は先の金属部分が鷹の鷹（とび）の爪に似ていることから名づけられました。



とび口は江戸時代から存在します。江戸の火事には、火笛が起きると現地のよつに十分な水がなかったため、燃えている建物を壊して消火しました。その時に使われたのがとび口です。

現在は、江戸時代のような消火活動は行いませんが、今でも消防で使用されており、威力が大きいので、壁を動かしたり、燃えたものを落としたりと、鉄鎧が安全に移動するための必需品です。



# 恵庭市の消防力

## 消防署



種別	はしご付消防ポンプ自動車	年式	平成28年
車号	恵庭7 (エニワ7)	馬力・定員	8,860cc 279ps 6名
ポンプ型式	モリタ A-2級	水槽容量	
総重量	20,680kg	全長 1,137 cm 高長 357cm 幅員 249cm	



種別	火災原因調査車	年式	平成26年
車号	恵庭13 (エニワ13)	馬力・定員	2,980cc 144ps 6名
ポンプ型式		水槽容量	
総重量	3,220kg	全長 474cm 高長 240cm 幅員 169cm	



種別	多目的小型動力ポンプ付積載車	年式	令和4年
車号	恵庭15 (エニワ15)	馬力・定員	2,990cc 3人
ポンプ型式	トーハツ B-2級	水槽容量	
総重量	6,295kg	全長 648cm 高長 317cm 幅員 225cm	



種別	大型水槽付消防ポンプ自動車	年式	令和4年
車号	恵庭22 (エニワ22)	馬力・定員	8,860cc 3名
ポンプ型式	日本機械 A-2級	水槽容量	10,000kg
総重量	21,995kg	全長 905cm 高長 341cm 幅員 249cm	



種別	高規格救急自動車 (非常用)	年式	平成21年
車号	恵庭50 (エニワ50)	馬力・定員	3,490cc 240ps 7名
ポンプ型式		水槽容量	
総重量	3,215kg	全長 564cm 高長 247cm 幅員 190cm	

## 消防署島松出張所

管轄区域 北島、穂栄、下島松、中島松、南島松、西島松、島松本町、島松仲町、島松寿町、島松旭町、島松東町、恵み野東、恵み野西、恵み野南、恵み野北、恵み野里美、林田、漁太、春日及び中央



種別	水槽付消防ポンプ自動車II型	年式	平成23年
車号	島松2 (シママツ2)	馬力・定員	8,860cc 320ps 6名
ポンプ型式	日本機械 A-2級	水槽容量	3,000kg
総重量	15,600kg	全長 773cm 高長 324cm 幅員 249cm	



種別	高規格救急自動車	年式	令和2年
車号	島松5 (シママツ5)	馬力・定員	2,690cc 151ps 7名
ポンプ型式	/		
総重量	3,255kg	全長 560cm 高長 249cm 幅員 189cm	

## 恵庭市消防署南出張所

管轄区域 緑町、住吉町、駒場町、相生町、和光町、恵南、戸磯、黄金中央、黄金南及び上山口



種別	水槽付消防ポンプ自動車II型	年式	平成29年
車号	恵庭南2 (エエミナミ2)	馬力・定員	6,400cc 240ps 6名
ポンプ型式	モリタ A-2級	水槽容量	3,000kg
総重量	12,640kg	全長 744cm 高長 303cm 幅員 234cm	



種別	高規格救急自動車	年式	平成30年
車号	恵庭南5 (エエミナミ5)	馬力・定員	2,690cc 151ps 7名
ポンプ型式	/		
総重量	3,275kg	全長 560cm 高長 249cm 幅員 189cm	

## 応援出動の歴史

### 有珠山噴火に伴う応援活動



平成 12(2000)年 3 月 27 日から火災性地震が頻発していた有珠山(壮瞥町)は、3 月 31 日 13 時 10 分頃西山西麓から噴火した。恵庭市消防本部は北海道広域消防相互応援協定に基づき、延べ日数 29 日、延べ隊数 53 隊、延べ人員 245 名の応援隊を派遣した。危険地域となった虻田町の住民のおおよそ 8000 人を地元消防職員・団員と共に緊急消防救助隊、北海道広域消防応援隊の派遣部隊が合同でほかの関係機関と協力しながら消防活動を行った。

## 出光興産タンク火災に伴う応援活動



平成 15(2003)年 9 月 28 日 10 時 46 分頃、十勝沖地震を起因として苫小牧出光興産北海道製油所(苫小牧市)にてタンク火災が発生した。恵庭市消防本部は北海道広域消防組合相互応援協定に基づき、延べ日数 12 日、延べ人員 61 名の応援隊を派遣した。タンクからの油抜き作業や、タンクの消火活動を行った。

東日本大震災に伴う応援活動





平成 23(2011)年、東北地方太平洋沖地震(東日本大震災)の発生に伴い、恵庭市消防本部は緊急消防援助隊北海道隊として延べ 3 隊(後方支援隊 1 隊、救助隊 2 隊)、13 名(後方支援隊 3 名、救助隊 10 名)を 19 日間(3 月 16 日~4 月 19 日)に亘って宮城県石巻市に派遣した。余震や津波への警戒を続けながら地元消防や関係機関と連携して消防活動を行った。